

## キンクロハジロは何歳まで生きるか？

○本間隆平・千葉 晃・白井康夫（瓢湖標識調査グループ）

新潟県瓢湖では 1954 年にハクチョウ類に対する給餌を始めて以来、その渡来数が次第に増加し、撒かれる餌を身近で食べるようになり、普通の農業用水池が‘白鳥の湖’として知られるようになった。同時に、ハクチョウ類だけでなくオナガガモ、ヒドリガモ、ホシハジロ、キンクロハジロなどのカモ類も多数集まるようになった。

1999 年、私たちはこれらのカモ類を対象に標識調査を開始した。オナガガモとヒドリガモは観光客が与える餌を求めて足下まで寄ってくるため、これらを網場まで誘導し、‘引き網’を倒して一気に捕獲し、1 シーズンに 2,500 羽を捕獲したこともあった。しかし、2008 年に発生した鳥インフルエンザを契機として湖岸はネットで囲まれ、観光客が餌を与えることも禁止された。このためオナガガモを‘引き網’まで集めることが困難になり、捕獲数は激減してしまった。これに対し、水面に浮かぶ餌だけでなく水底に沈んだ餌を潜水して採るホシハジロとキンクロハジロは給餌体制の変化の影響を受けず、流入水路（ヒューム管）に流した餌に誘引されて管内に深く入る個体を‘タモ網’で捕獲することができた。

2003 年からこの方法で本格的にキンクロハジロの標識調査を開始し、これまで捕獲した約 1,650 羽のデータを基に性差、幼成比、回帰率などについて順次発表してきた。今回は 15 年間の資料から生存年数について検討した結果を報告する。

調査開始からこれまでに再捕獲された 250 羽（Rt）についてみると、初捕獲から 7~8 年後に再捕獲されたもの 6 羽をはじめ、9 年後に 4 羽、10 年後に 4 羽、11 年後に 7 羽、12 年後に 2 羽等の再捕獲事例が得られた。これらの中には今後再捕獲される可能性もあり、総合すれば本種の生存年数は長いもので十数年と推定される。

なお、瓢湖で越冬する本種の中で同一個体が同一シーズン内（短期間内）に再捕獲される‘Rp’や翌年以降（6 カ月以上を経て）同所で再捕獲される‘Rt’の例もかなり多い。その背景には、本種が①捕獲等の人為作業に対して警戒・忌避性が薄いこと（馴れ）や、②人工給餌に高い依存性を持つこと等が関係しているように思われる。一方、瓢湖で放鳥した個体が他の越冬地で再捕獲される例や、逆に他所で標識放鳥されたものが瓢湖で再捕獲される‘Rc’は予想外に少なかった。これは、本種を対象とする標識調査箇所があまり多くないためと思われる。また、給餌による誘引の有無も影響している可能性がある。